

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館

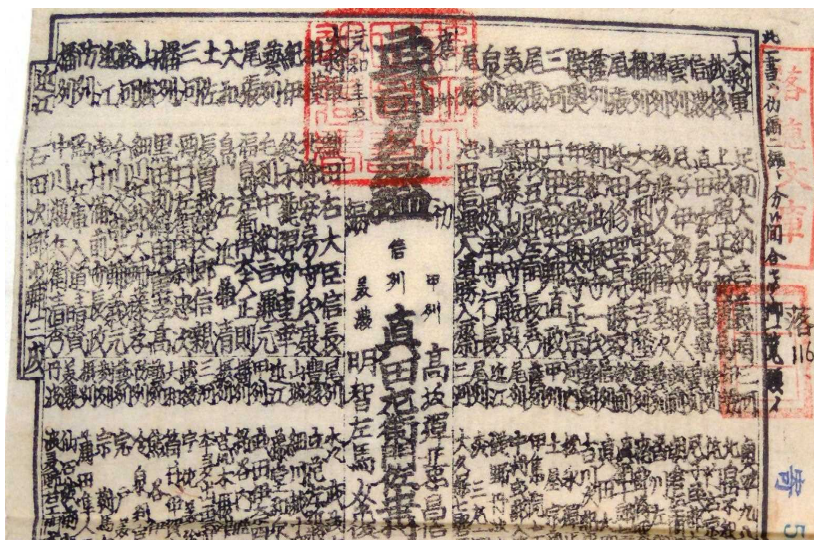
2018.9

第85号

戦国武将の武勇ランキング

「三枚の「武者鑑番付」より」

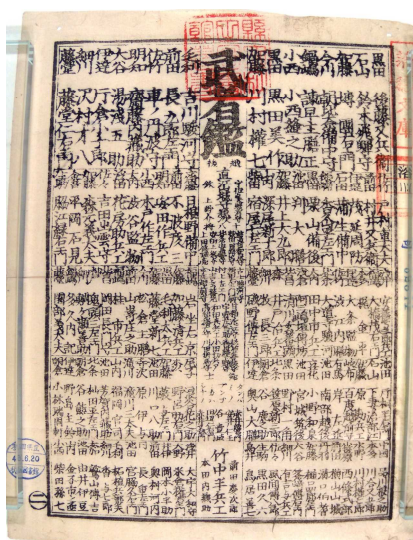
日本人は“ランキング好き”と言われます。外国にもスポーツ選手・チームのランク付けや音楽チャートなどがありますが、朝のテレビの占いから、芸能人グループの「総選挙」に至るまで、様々なランキングが日本中にあふれているようにも見えます。



写真①「武勇名鑑番付表」(落0116)



写真②「武者鑑番付表(一)」(落0117)



写真③「武者鑑番付表(二)」(落0118)

そのようなランキングの日本における元祖的存在が相模の番付表です。近世以降にはその形式を模した各種の番付が作成されてきました。当館所蔵史料「落穂文庫」の中から、戦国武将に関する木版刷りの番付表を三つご紹介いたします。

七月の「古文書解読講座」には、多数ご参加いただき、ありがとうございました。現在、企画展「秋田と海」を二階特別展示室で開催中です。ぜひお越しください。

まずは「武勇名鑑番付表」(写真①)です。これは戦国期の主な大名・武将などをランク付けしたものです。東の最高位(江戸時代の相模の番付表では大関の場所)には大將軍として「足利大納言義晴」(室町幕府十二代將軍)、西の大將軍には「織田右大臣信長」と記されています。ちなみに佐竹義宣は尼子晴久などと共に前頭辺りの場所に格付けされています。相模の番付表では行司が記される中央の部分には「真田左衛門佐幸村」がいます。中央の一番下には「勸進元」として「太閤記」「北越軍記」「甲陽軍記」とありますので、これらの軍記を元に作成されたランキングである事が分かります。

これに対して「武者鑑番付表(一)」(写真②)※以下(二)、「武者鑑番付表(二)」(写真③)※以下(二)という、二つの番付表があります。

この二点は主に織豊政権期から大坂の陣にか

けて活躍した武将の名前が並んでいます。(一)には、東の最高位に石田三成の家老であった「島左近」、西に尼子氏の再興に尽力した「山中鹿之助」(幸盛)が配されています。行司の位置の中央には「山本勘助入道晴行」、佐竹氏配下の武将としては「梅津半左衛門」「渋江内蔵助」などが記されています。このうち梅津半左衛門は「黄鬼」といわれた梅津半右衛門憲忠と考えられます。秋田県関係では生駒氏に「生駒善助」(善長か)の名が見えます。

また(二)の東の最高位は「後藤又兵衛」、西には「吉川駿河守」(元春)が陣取ります。行司の位置の中央には「直江山城守兼次」、佐竹氏配下として「戸村重太夫」(十太夫義国)・「渋江内膳」(政光)・「車ノ丹波守」(車斯忠)、生駒氏の配下に「脇江緑右衛門」「黒田久六」が名を連ねています。

このような番付は明確な基準があるわけではなく、作成者の主観が多分に入ったものです。で、居並ぶ人名やその格付けについては大いに異論のあるところだと思いますが、逆にそのランク付けについてあれこれという合図のがまた楽しかったのかも知れませんね。

歴史は好きだけど、古文書のくずし字は読めなくてという方は、このような史料から挑戦してみたいいかがでしょうか。【煙山英俊】

古文書こぼればなし

『岡本元朝日記』から拾う

「豊巻十歩一番所」のあれこれ

江戸時代、秋田藩では、藩内の主要な河川に、往來する川船の觀察、また積み荷から十分の一の税を徴収、通行者の監視をすることを仕事とする「十歩一番所」を設置していました。雄物川左岸にある秋田市豊岩にも「川方番所」と渡船場をも兼ねた「豊巻十歩一番所」が設置されていました。

正保二年（一六四五）、前記の秋田市豊岩（豊巻）には由利領との境に「境口番所」が置かれ、関所的役割をしていましたが、雄物川の治水対策として万治三年（一六六〇）から延宝三年（一六七五）までの長い年月をかけ、大きく湾曲をしていた川筋を直流させる開削工事が終了すると、川筋が豊岩側に寄ったため「川方番所」も兼ねていました。しかし川筋が変化したためか、後に五〇〇メートルほど下流の石田坂に移され、

豊巻十歩一番所として幕末まで運営されていました。移された時期は不明です。元禄の頃に移されたとの伝承がありますが、はっきりしませんが、ともかく番所には、御会所から藩士一名と足輕二名を交代で監督に当たらせていました。

しかし、この番所は金銭を扱い、また渡し場でもあるため人命も扱っていたこともあり、少なからずトラブルも時折発生していたようです。

この番所では、船が重要な役割を果たします。

第85号 (2018年9月号)

川船には、用途により種々の形と大きさも大小さまざまありますが、ここでは渡し船と大きな船として馬船が用いられていたようです。享保九年（一七二四）に藩から「繰船」といわれる桂木製の船が支給されたことが豊岩の記録にあります。これは渡し船として用いられていたようです。川向こうの仁井田、牛島を経て久保田へ向かう道筋に当たるので、地元の人たちの他に由利領の人たちも多く通り、利用されていた

「岡本元朝日記五七 宝永七年九月〜十二月」

（混架〇〇七―三八〇―五七）に次のような話があります。宝永七年（一七一〇）九月二七日（新暦の十一月七日）の暮れ過ぎ、寺内代官の岡崎郷右衛門から、「豊巻十歩一番所で渡船が乗り沈みし、渡し守二人と馬一匹が見えない」との報告がありました。元朝は「たぶん大人数を乗せたからでしょう」と言い、詳しく調べて報告するように申し渡します。それから一日置いた二九日の報告では、「船で沈んだ人たちは由利郡の人たちで、こちらの渡し守と合わせて九人が行方不明になった」とありました。これに対し元朝は、「調査を打ち切りにいたせ」と申し付けたとあって、この後の処理はどうなったか一切書かれていないことが不思議です。

この番所を往來する時は、証明になる焼印を提示することが義務づけられていました。焼印は藩から村へ下げ置かれていて、往來の節はこれを見せ、挨拶して通っていたようです。この番所で焼印の紛失事件もあり、再発行を願った記事もあります。

この番所は廃藩置県後に廃止されますが、船場として村の経営となり、昭和三〇年代まで経営されていました。

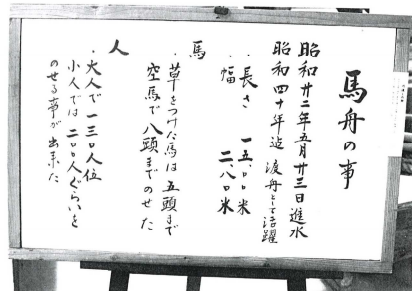
【嵯峨稔雄】

「豊巻十歩一番所風景図」（スケッチ 武藤一郎）



馬を乗せた川船の様子

（大仙市総合民俗資料交流館「くらしの歴史館」）



公文書館よりお知らせ

◆「歴史講座」の開催

当館では、この秋、歴史講座を開催します。内容は、県指定文化財の「出羽一國御絵図」（県C一六〇三）や現在開催中の企画展「秋田と海」を題材としたものとなります。八月十七日（金）より参加受付を開始しております。定員に達し次第、受付を終了いたしますので、お早めにお申し込みください。当館閲覧室及びエントランスホールで申込用紙を配布中です。

○第一回 「出羽一國御絵図」ものがたり

―正保年間の国絵図作成と戦後の再発見―

・日時 九月二一日（金）

午後一時三〇分〜三時

・会場 当館三階多目的ホール

○第二回 企画展「秋田と海」を見る

・日時 十一月二九日（木）

午後一時三〇分〜三時

・会場 当館三階多目的ホール